

キュウリ栽培暦

(直播き、自然形仕立て)

栽培管理の重点

- ・畑の準備＝集作り
- ・播種時期＝産卵期
- ・育成期＝子育て
- ・自立期＝集立ち

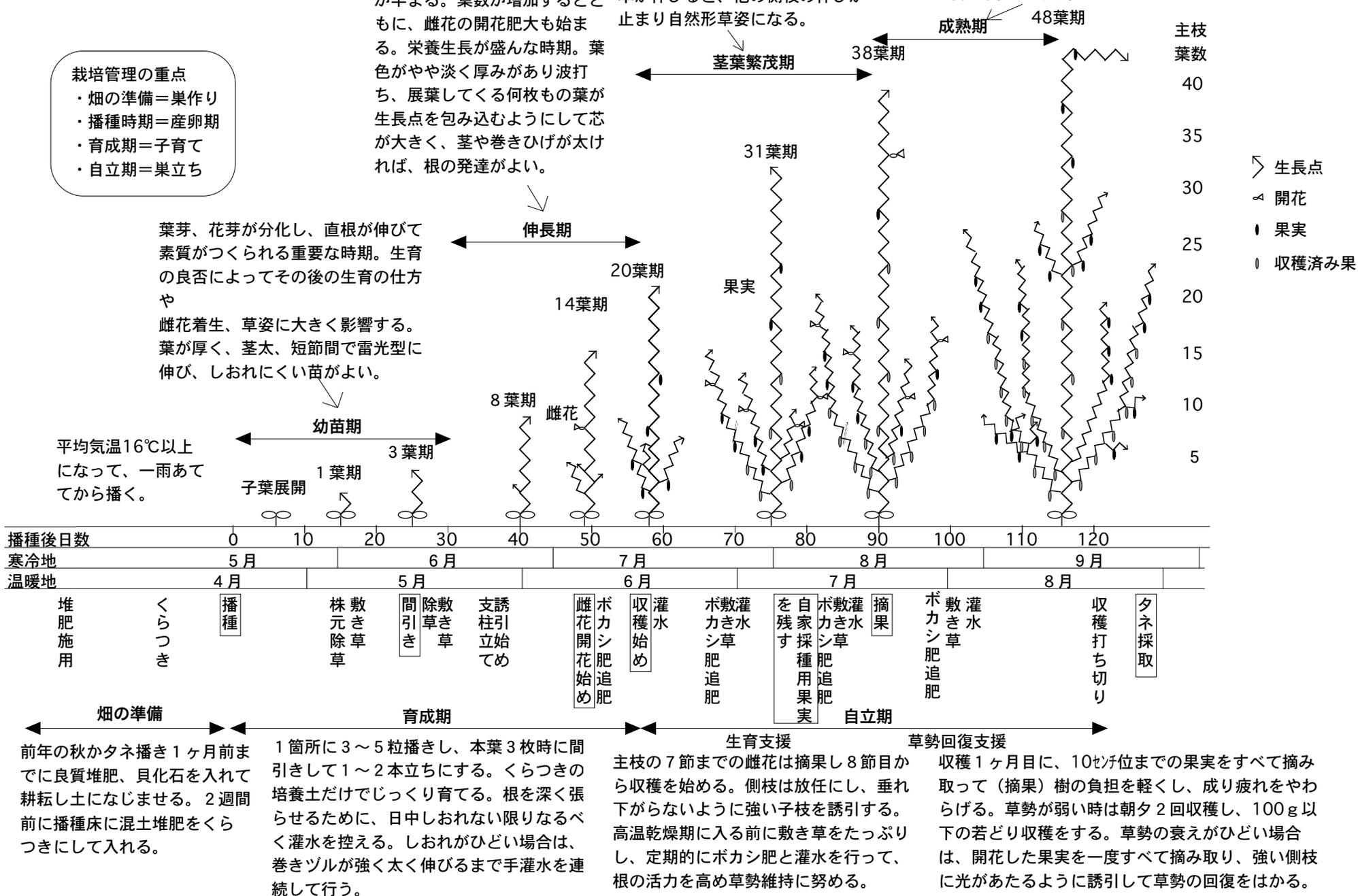
葉芽、花芽が分化し、直根が伸びて素質がつくられる重要な時期。生育の良否によってその後の生育の仕方や雌花着生、草姿に大きく影響する。葉が厚く、茎太、短節間で雷光型に伸び、しおれにくい苗がよい。

平均気温16℃以上になって、一雨あててから播く。

本葉7～8枚頃からツルの伸びが早まる。葉数が増加するとともに、雌花の開花肥大も始まる。栄養生長が盛んな時期。葉色がやや淡く厚みがあり波打ち、展葉してくる何枚もの葉が生長点を包み込むようにして芯が大きくなり、茎や巻きひげが太ければ、根の発達がよい。

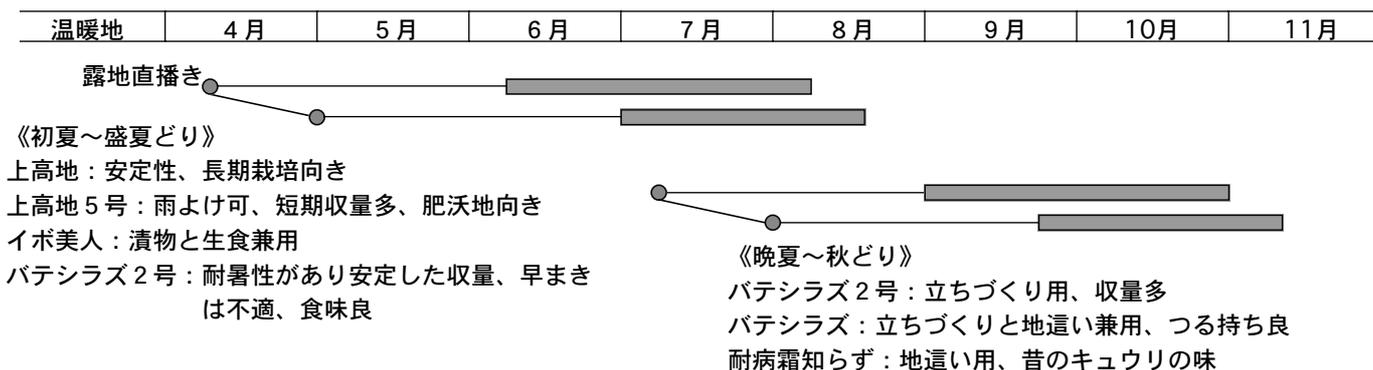
雌花の着果肥大と側枝発生が盛んになり、栄養生長と生殖生長が併行して行われる。強い子ツルが何本か伸びると、他の側枝の伸びが止まり自然形草姿になる。

収穫期がピークを過ぎると側枝の伸びが弱まり、曲がり果、尻太果、尻細果が増えてくる。タネ取り用の果実が熟し始め生殖生長が盛んになるとともに草勢が衰えてくる。



《その特性と栽培のポイント》

【作型と品種の使い分け】



【栽培のポイント】

自然農法種子は、少肥栽培で能力を発揮する品種を目標に、直播き、不耕起の栽培条件で選抜を繰り返しました。選抜の重点を雌花の着生より側枝の発生におき、吸肥力が強く生育旺盛な系統を選び品種を育成しました。このような特性を生かすためには、肥料で育てるのではなく、根の強さを生かし、地力で育てる栽培管理がポイントになります。

畑の準備（地力で十分に生育できる土壌環境づくり）

《有機物の施用》腐植化をすすめるため、堆肥や緑肥（エン麦、アカクローバなど）などの有機物はなるべく前年の秋に鋤込む。春の鋤込みは、よく完熟した堆肥を用い、作付け1ヶ月前までに行う。未熟堆肥は鋤込まず表層に敷く。

《草生栽培》畦間にアカクローバやイタリアンライグラスなどの緑肥を生やして、土壌を保全する。

《輪作》小麦、大豆を輪作して土壌有機物を増やす。

育成期（健全な根の育成と根圏環境づくり）

《直播き・若苗定植》直根を傷めないように直播き又は若苗定植して、根の活力を高める。

《鞍つき》EM生ゴミ土や刈り草と土を交互に積み上げて作った混土堆肥で鞍つきをつくり、幼苗期の培養土にする。

《粗植》畦間、株間にゆとりをもたせ、根群の発達と茎葉の充実をはかる。

《敷き草》株元に刈草や堆肥を敷いて、根圏に土壌動物や有効微生物を増やし生物環境を改善する。

自立期（根の活力を高める仕立て方と草勢維持）

《収穫始めの調整》ツルの充実を優先させるため、主枝15節以下の果実は摘み取り、本葉20枚以上になってから収穫を始める。

《自然形仕立て》無整枝にして強い側枝を誘引し、生育のバランスをとり、根の活力を高める。

《刈り敷き》刈り取った野草、雑草を株の周りに敷き草にし、表層に腐植層をつくる。

《ボカシ肥の追肥》米ぬか主体のボカシ肥（20～30g/1）を10日～2週間おきに敷き草の上に施用、灌水して新根の発生を促す。

《摘果》成り疲れ時期（収穫1ヶ月頃）に、親指大以上の果実をすべて摘み取ってツルの負担を軽くし、草勢の回復をはかる。

【キュウリの自然形仕立て】

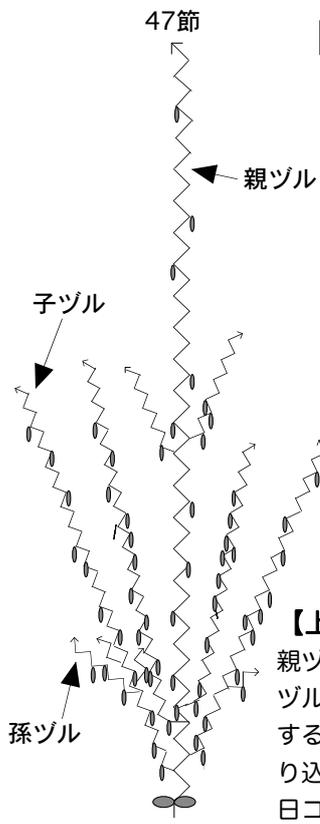
整枝は生長点を摘心することによって生長を抑制し、雌花の着生を良くしますが、根の生育も抑えるため、養水分を常に株の付近に供給できる土壌条件を整えなければなりません。そのため、堆肥や肥料を多量に施して深耕し、定期的に追肥や灌水をするなどのこまめな管理が必要になります。しかし、少肥にして地力で生育させる栽培では、整枝・摘心は栄養生長を弱め、成り疲れを助長して病気の発生や茎葉の老化を早めることとなります。特に自然農法の種子は無整枝で育成しましたので、強整枝はストレスの原因になり、特性がうまく発揮されない場合があります。無整枝にしたとき1株から発生する側枝の数には個体差があり、根がよく張り強勢な生育をしている株ほど側枝数も多く発生します。また、土の肥沃度によっても異なり、肥沃なほど側枝数も多くなります。キュウリを無整枝放任にしても密植や多肥の条件では、過繁茂になって雌花の着生を悪くしたり、曲がり果や生理落果を発生させたりします。自然形仕立ての草姿は、葉が濃すぎず、小さく厚く波打ち、節間が詰まり充実しているのが特徴です。ツルが混み合って過繁茂にならないように元肥を減らし株間を調整し、ツルを上手に誘引してキュウリが無駄な生長をせず、自己調整できる体勢を整えてやる（自然草姿を生かす）のが自然形仕立てのポイントです。子ツルの発生数はすべて異なるので株の能力に応じて、側枝発生が多い株は少ない株の方にも子ツルを誘引して空間を有効に生かし、全体の収量性を高めるようにします。

自然形仕立てのポイント

- ・地力を高める（緑肥、堆肥などの有機物を入れて腐植を増やす）
- ・多肥は避け少肥で栽培する。（元肥チッソ成分で10a当たり5～10を目安）
- ・密植は避け粗植にしてゆとりを持たせる。（親ツル、子ツルの間隔が30、前後になるように誘引）
- ・敷き草を定期的にして地表に有機物を増やし、根群の発達を促す。（生ワラより分解の早い青草が有効）

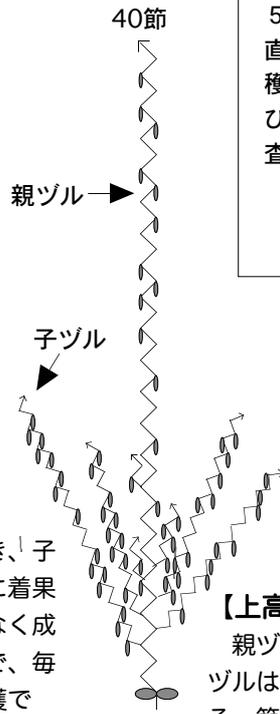
【品種の特性と自然形仕立ての草姿】

5月25日播種
 直播き栽培で2ヶ月収穫後勢いのよい株を選び、着果節と側枝を調査



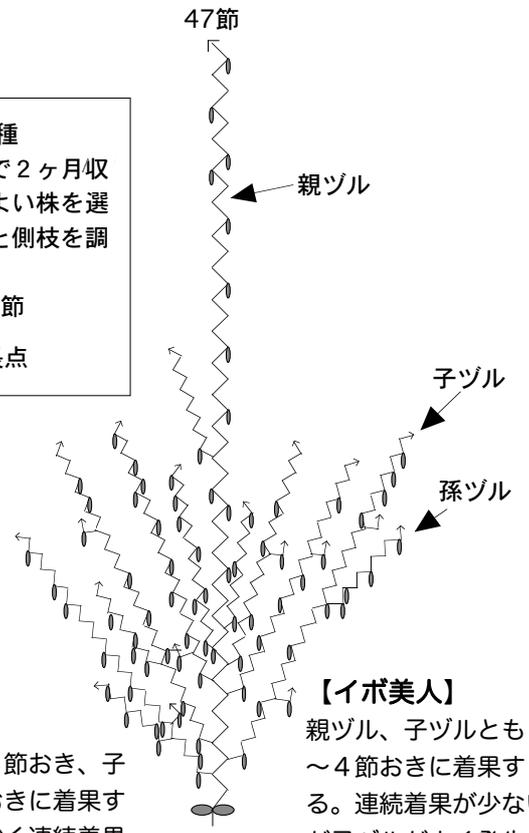
【上高地】

親ヅルは4～5節おき、子ヅルは3～4節おきに着果する。連続着果が少なく成り込みが緩やかなので、毎日コンスタントに収穫でき、成り疲れが少なく長期栽培が可能。露地の早まきから普通栽培に適する。子ヅルの発生は中位で栄養生長と生殖生長のバランスがよく土壌適応性が高い。堆肥が十分入れば少肥で栽培できる。



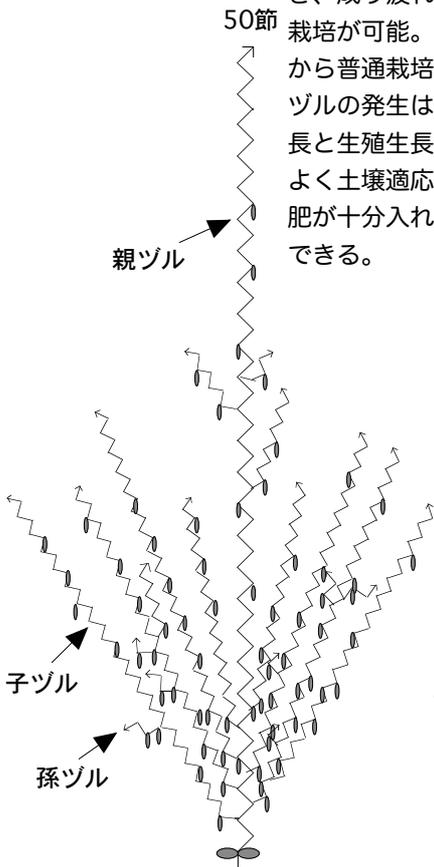
【上高地5号】

親ヅルは3～4節おき、子ヅルは2～3節おきに着果する。節成り性が強く連続着果が多いので短期間に収量が上がる。収穫量の変動が出やすいので、適宜な追肥、灌水が必要。葉がやや角葉、すっきりした草姿で生殖生長がやや旺盛。雨よけハウス栽培や肥沃でつるぼけしやすい畑に適する。



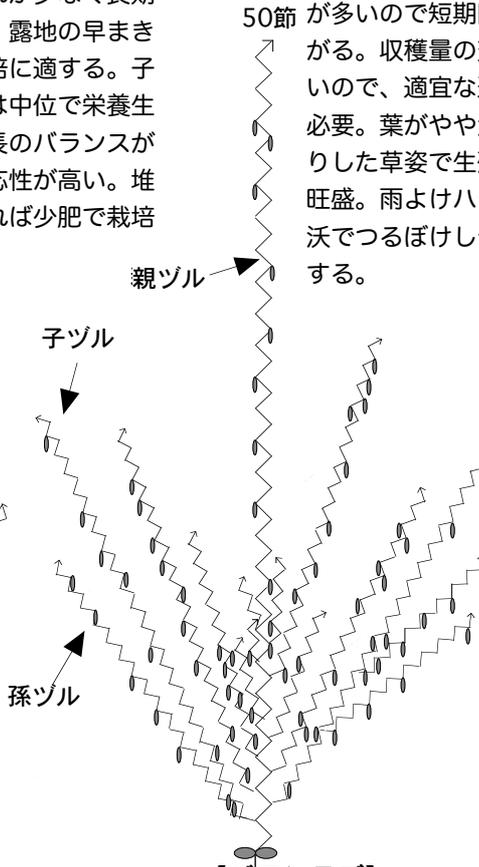
【イボ美人】

親ヅル、子ヅルとも3～4節おきに着果する。連続着果が少ないが子ヅルがよく発生し、多収性である。茎が太く生育旺盛で大柄な草姿となり長期栽培が可能。果実が長く乾燥すると尻細りや曲がり果が発生しやすいのでこまめな灌水と追肥が必要。親ヅル



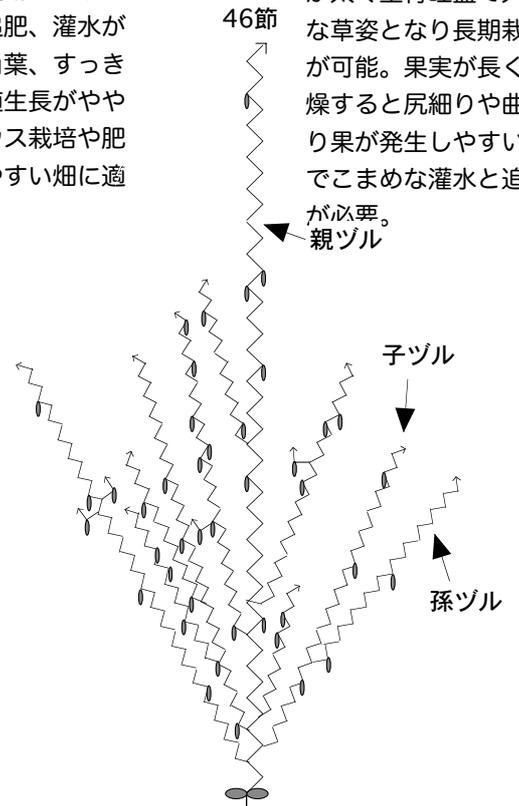
【パテシラズ2号】

親ヅル、子ヅルとも5～6節おきに着果する。葉数が多く、子ヅルの勢いも良く、栄養生長が旺盛。茎が太く短節間で立ちづくりに適する。収穫量に波がなく成り疲れも少ない。低温伸長性は劣るので早まきには不適。耐暑性が優れるので盛夏から晩秋にかけて収穫する栽培に適する。強勢なので多肥や密植は避ける。



【パテシラズ】

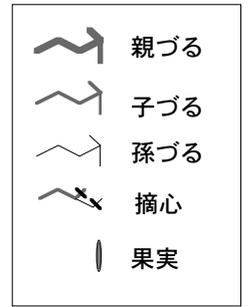
親ヅル、子ヅルとも5～6節おきに着果する。子ヅル、孫ヅルの発生が旺盛でツル伸びがよく、耐暑性、耐乾性に優れる。小葉で節間が短いので地這栽培にも適する。初期収量は少ないが後期まで草勢が強く、霜が降りるまでコンスタントに収穫できる。



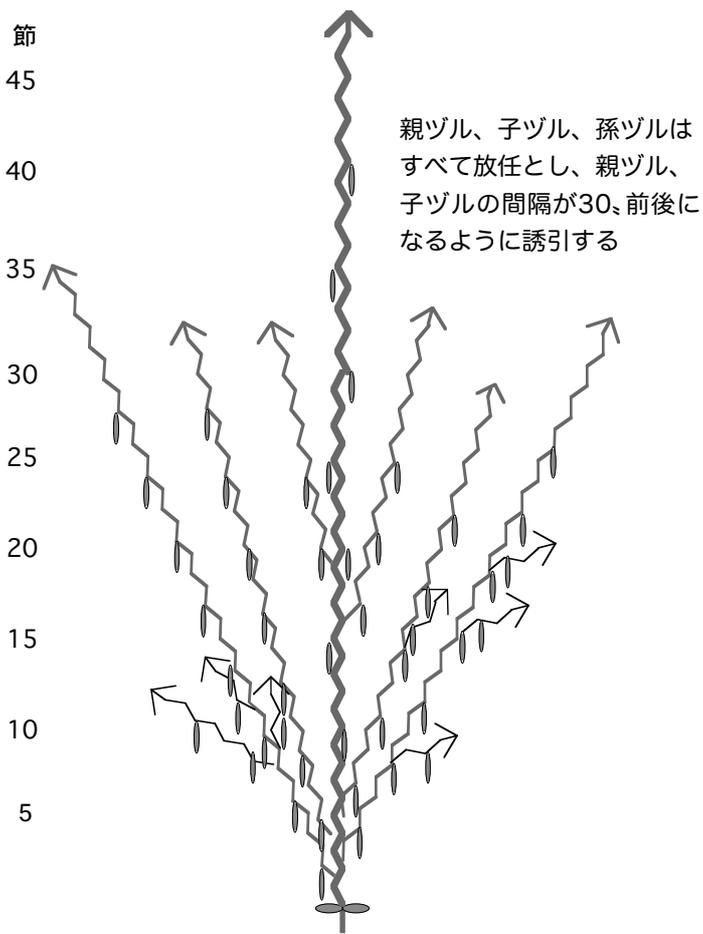
【耐病霜知らず】

親ヅル、子ヅルとも7～8節おきに着果する。角葉、小葉で耐暑性、耐乾性に優れ地這栽培に適する。葉数が多いわりに雌花が少ないので大果で収穫しても成り疲れしない。120g位の大きめで収穫すると風味があり美味しい。

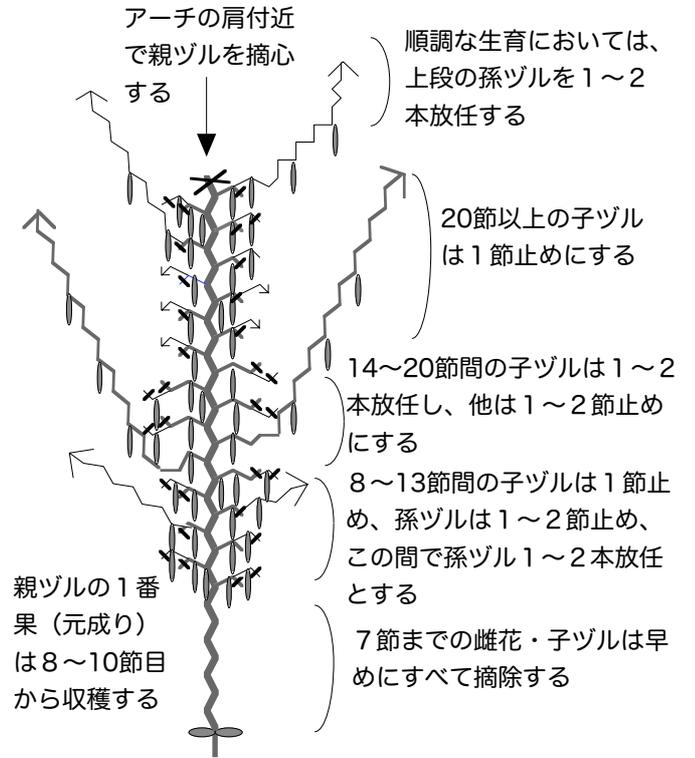
[自然形仕立てと摘心仕立ての比較]



無整枝自然形仕立て

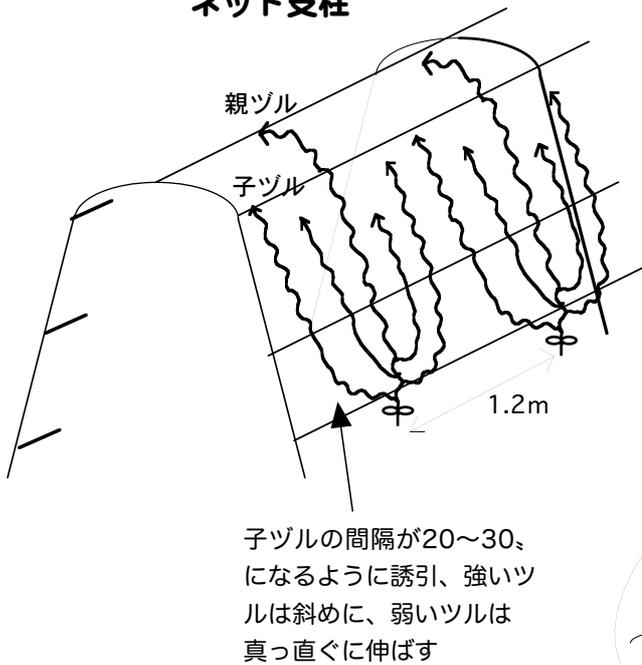


1本仕立て

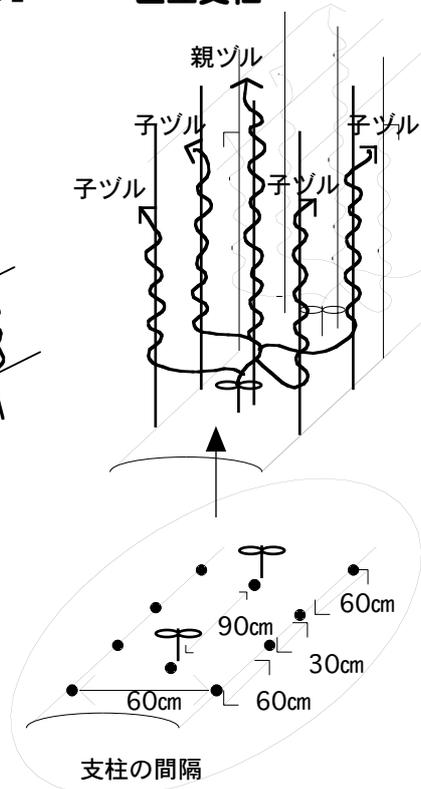


[自然形仕立ての誘引の仕方]

ネット支柱

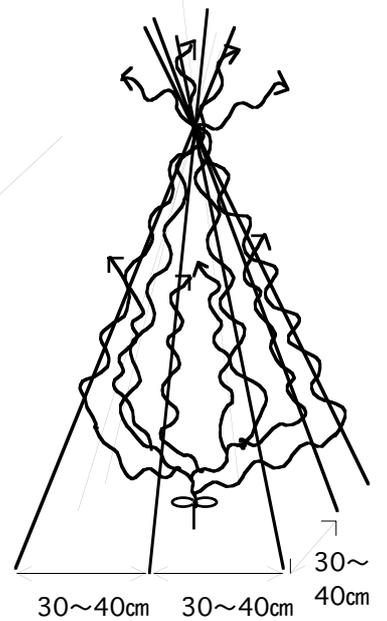


直立支柱

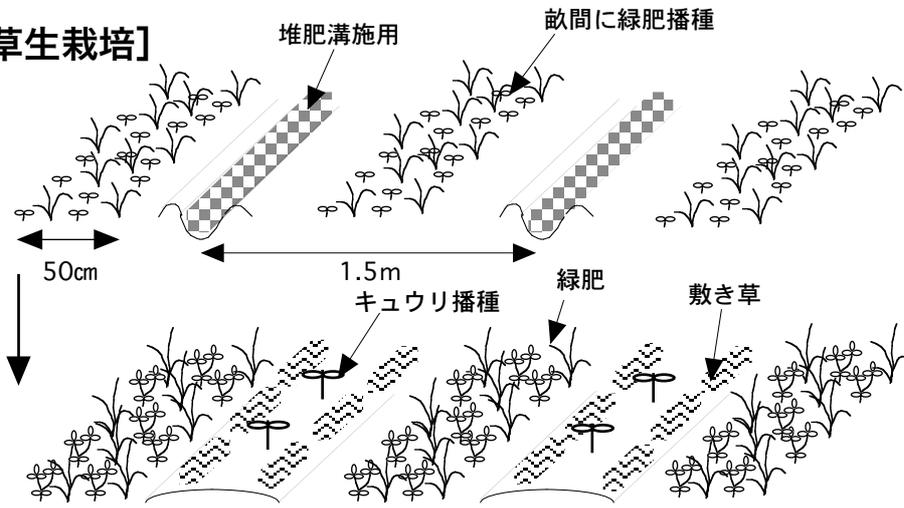


合掌支柱

(5~8本)

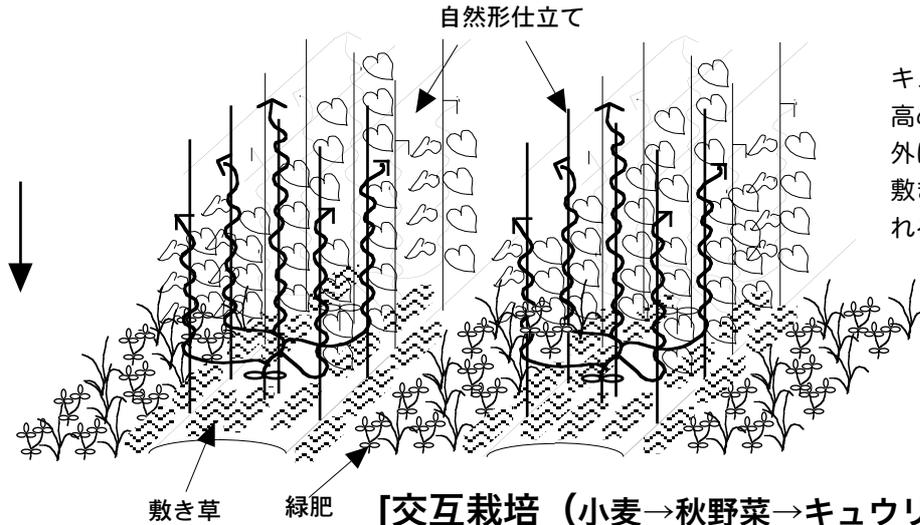


[草生栽培]



秋又は作付け1ヶ月前までにキュウリの播種床に溝を切り完熟堆肥を施用。畝間に緑肥（イタリアンライグラス、アカクローバなど）を幅50cm位に散播しレーキで軽くかき混ぜる。緑肥播種時期：温暖地春まき3～4月、秋まき9～10月

緑肥は草丈20cm以上伸ばさないように定期的に草刈りし、キュウリの敷き草にする。



キュウリの仕立て方は、草との競争力を高めるために自然形仕立てにし、草生以外は敷き草で被覆して根群の発達を促す。敷き草は分解が早いので土がいつも覆われるように定期的に刈り敷きする。

[交互栽培（小麦→秋野菜→キュウリ）]

交互栽培とは
同じ畑で異なる作物を畦を変えて交互に作付けることで、休閑することなく連続して栽培することができる。穀類と野菜、草生を組み合わせた交互栽培は輪作が効率よく行われ、常に土が植物で覆われるため、土壌が保全され、様々な土壌生物の生活圏がつくられて、腐植が蓄積し土が膨軟になり、土づくりに役立つ。

